

## 1. 英語コミュニケーション学とは？

コミュニケーションを学問的にとらえようとしているのは記号論 (semiotics) で、人間の五感のうちコミュニケーションに主に用いられる3つの感覚、(1) 触覚 (tactile)、(2) 視覚 (visual)、(3) 聴覚 (aural) を研究対象としている。(1)の触覚は、近接学 (proxemics) という名の下に、(2)の視覚は、動作学 (kinesics) という名の下に、(3)の聴覚が、オーラル・コミュニケーション (oral-aural communication) という名の下に研究されてきている。そして、この(3)のうちの「(話し言葉や書き言葉を通しての) 英語を使ったコミュニケーション」が「英語コミュニケーション学」が主に扱う分野だと考えられる。

そこで、このシンポジウムでは、英語によるコミュニケーションにおいて意思伝達を正確に行うために必要な英文法・英語学の知識の重要性について論じた。

## 2. 従来の英語教育の問題点

従来の英語教育は文法的能力 (grammatical competence) を身につけることを中心に、文を文法的に理解したり、文法的に正しい文を作ることが出来ることに重要が置かれていた。そのために、英語を理解したり、使ったりする上でいろいろな問題が存在する。

まず、あげられる。日本語の訳語だけで学ぼうとするため、「a. 訳語による理解の妨げ」があったり、「b. 表現間の意味の違いの理解の不足」、「c. 前置詞の本質の理解の不足」、「d. 冠詞の知識も不足」などもあり、次のような表現の意味の差の理解が難しいようだ。

(1) a piece of paper, a sheet of paper (2) few, a few, several, some

(3) the departure of the train, the destruction of a city

(4) occasionally, sometimes, often, usually (5) had better, should

(6) a. I will visit Tom. b. I am going to visit Tom. c. I am visiting Tom.

(7) a. When will you visit us again? b. When will you be visiting us again?

(8) speak about/ on (9) a. She danced in the room. b. She danced into the room.

(10) a. Do you have the time? b. Do you have time?

(11) a. This is a book. b. This is the book.

また、「e. 文法用語と意味のずれ」に気がつかなかった。例えば、次の(12)(13)(14)のような場合、過去形は過去のことを、現在進行形は今のことを表すと理解していたり、過去に完了したことは過去完了形を使って表さなければならないと思っている学生がいる。

(12) I could solve the problem. (13) I am visiting my aunt tomorrow.

(14) I wondered whether you would help me. (= I wonder ...)

「f. 否定と比較の理解の不足」も日本人の不得意なものの一つで、頻繁に使われる割には学生が誤解するものの中の一つである。

(15) I couldn't agree with you more. (16) I couldn't be happier.

### 3. 高レベルのコミュニケーションと英語学的知識

コミュニケーションには低レベルのコミュニケーションと高レベルのコミュニケーションとがあると考えられる。つまり、低レベルのコミュニケーションとは片言でもいいから何とか自分のいいたいことを伝えることで、高レベルのコミュニケーションとは自分のいいたいことをできるだけ自然かつ効果的に伝えることだといえる。

最近の英語教育はコミュニケーション能力(communicative competence)を身につけることを重要視している。これはいいことだと思われる。しかし、英文法は不必要で、いかに通じることの方が重要という、低レベルのコミュニケーションを目指すのではこれからの国際社会に対応できない。

2. で見た「従来の英語教育の問題点」を克服できるのは、従来の文法説明ではなく、コミュニケーションに重点を置いた英文法・英語学的説明である。他にも考えられる問題点も克服し、意志疎通を効果的に行うためには、英語学の研究分野からコミュニケーションに関わる部分を抜き出し、それを発展させることが必要不可欠だと思われる。これこそが、英語コミュニケーション学であると思われる。

それでは、このコミュニケーション学の重要な一分野を占めるとされる「スピーチレベルの理解」を取り上げてみることにする。英語を使う場合、その状況により、次のように formal/ informal/ neutral expressions を使い分けている。

- (17) a. That is most unfortunate for you. b. That's too bad.  
c. I'm sorry to hear that.

これは、表現形式だけでなく、次のように単語のレベルなどにも当てはまる。この場合、Anglo-Saxon 系の語が informal、Latin 系の語が formal な語である。また、1 語動詞と句動詞を比べたら、1 語動詞の方が formal で句動詞の方が informal である。

- (18) continue/ keep (19) conclude/ end (20) resemble/ take after  
(21) represent/ stand for (22) conquer/ get over

また、句のレベルでも formal な表現と informal な表現がある。

- (23) on account of/ because of (24) in spite of/ despite/ notwithstanding

そして、日本人に多く見られるのが、スピーチレベルの混同である。これによりコミュニケーションがうまく行かないことは当然のことなのだが、あまり関心が払われていない。

- (25) ?Hi, Mr. Yamada. (26) ?It is a matter for regret that he didn't get in touch with me. (contact)

同様に「ていねいさ」というのも、コミュニケーション学の一分野を占めるとされる。

### 4. 英語コミュニケーション教育のために

コミュニケーション教育が強調されるようになって、英文法や英語学の知識が不要になったと思うのは間違いで、反対に重要になったといえる。しかし、それは従来の英文法的知識でなく、コミュニケーションの観点からの英文法・英語学の知識である。ある文がどのような場面で使われどういう意味、含みを持つかが重要になってくる。上で見た、英語学の研究分野からコミュニケーションに関わる部分を抜き出し、それを発展させた形の英語コミュニケーション学を追求することで、英語学的知識と英文法をうまく教育に組み込めば英語コミュニケーション能力をまだまだ高められるはずである。